

# 冬の時代の診療所経営

## 診療所と地域との絆としての「家族会」



医療法人社団裕和会理事長  
長尾クリニック院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業。尼崎市医師会地域医療連携・勤務医委員会委員長。尼崎市医師会内科医会前会長。医学博士。著書「町医者力」「パンドラの箱を開けよう」(エビック)「在宅療養を支えるすべての人へ」(共著、健康と良い友だち社)など

HP <http://www.nagaoclinic.or.jp>

ブログ <http://www.nagaoclinic.or.jp/doctorblog/nagao/>

在宅看取りを行っている診療所の多くが、看取りに関わった家族を対象にいわゆる「遺族会」のようなイベントを開催しています。しかし当院では、こうした「家族ケアシステム」は決して十分に行えていませんでした。すでに500人を超える在宅看取りを経験し、医師や看護師が患者宅を空いた時間に「慰問」してはきました。しかし複数の家族が集って語り合ったことは1度もありませんでした。

そこで今年3月にクリニックに10人の家族に集まっていたいただきました。在宅スタッフたちの長年の願いがようやく実現しました。黙祷の後、私が故人たちへの想いを述べ、看護師やケアマネがそれぞれの立場から率直な気持ちを述べました。それに触発された形で家族もさまざまな想いを続々と吐露されました。

話をしながら泣き出す家族、もらい泣きをする在宅スタッフ。無意識のまま抑圧されていた家族とスタッフの想いが噴出し、1つになった瞬間でした。最後に全員で何曲か歌を歌いました。このような企画をして本当に良かった！と思いました。全く知らなかった家族の想いを初めて知り、私自身も少し成長できた貴重な機会でした。

これは看取りに関わった家族のみならずケアスタッフのグリーフケアを兼ねています。また診療所と地域の絆を深める貴重な機会でもありました。「個人」対「個人」の関係であった在宅医療が、「地域医療資源」対「地域住民」という関係に少しだけ広がったと感じました。

たとえ故人を偲ぶだけでも意味があると考え、訪問看護師が中心となりこの1年間に亡くなった方に手紙を差し上げました。出席者はその半数にも及びませんでしたが結果的に、10人位がちょうどいいと思われた人数でした。会のネーミングに悩みました。「遺族会」というネーミングは他の診療所での例で知ってしまし

たが、どこか腑に落ちません。というのも「人類みな遺族」が私の持論だからです。ならば素直に「家族会」でいいのですが、なんだか平凡です。結局、毎年3月に開催することに決めましたので当院の場合は「弥生会」と命名しました。ちなみに4月にお花見会、12月にクリスマス会も開催しています。

兵庫県立柏原病院における小児科医療を守る会のように、これからの地域医療再生は「患者力」に期待されています。とはいえ患者には、元来横のつながりがありません。そのきっかけを最初に提供するのは医療者しかいないでしょう。最初は、医療者の呼びかけで集まった患者や家族です。しかしできればその家族同士が連絡を取り合って、例えば尊厳死に関する市民フォーラムを患者会や家族会に企画してもらえることを夢見ています。

こうした家族会は診療所が真の意味での地域の社会資源となるための一里塚だと感じました。一方、健康教室や市民フォーラムなどの開催での地域貢献も大切です。しかし今回の家族会のような個人的な、あるいはスピリチュアルな交流の場ももっと大切にしたい。在宅看取りが増える中、「看取ったら終わり」ではなく、「看取ってからがご縁の始まり」と考えたい。これは診療所経営術というより経営者の志と認識したい。経営には、信頼が基盤。その信頼とは、クライアントと想いを共有し絆を築くことだと感じました。